

# 銃より貧しい人に投資を

【ロンドン＝稲田信司】

ノーベル平和賞授賞式が10日、ノルウェーの首都オスロの市庁舎であり、貧困に苦しむ女性の自立を支えるバンクグラデシユの金融機関「グラミン(農村)銀行」と、その創始者であるムハマド・ユヌス氏(66)にメダルと賞金1千万スウェーデン圀(約1億6千万円)が贈られた。同氏は受賞演説で「貧困は平和への脅威だ」と語り、対テロ戦争に走る世界の指導者に警告を發した。

ユヌス氏は「世界の指導者の関心が貧困との闘いからテロとの戦いへと移行した」と指摘した。「貧しい人々の生活改善に資金を投入する方が、銃に使うよりも賢明な戦略だ」と述べ、イラク戦争に巨費を投じる米國などの姿勢を批判した。

## ノーベル平和賞 ユヌス氏、授賞式で演説

経済学者であるユヌス氏は74年、バンクグラデシユを襲った大飢饉を目の当たりにし、農村で、特に家計を切り盛りする女性に力点を置いた無担保少額融資「マイクロクレジット」を考案。「貧者の銀行」と呼ばれるグラミン銀行から融資を受ける人は同國で約700万人にのぼり、他の途上國でも広がっている。

ユヌス氏は演説で、貧困層への融資のような社会性の強い事業を「ソーシャルビジネス(社会的事業)」と表現。利益の最大化を求めた従来の営利企業でもなく、寄付に頼る非営利組織でもない。貧困など社会問題の解決という目的を最優先する新たなタイプの事業と位置づけた。

「ソーシャルビジネスは、世界の人口の60%を占める貧しい人々の暮らしを変え、貧困からの脱却を手助けすることができる」

さらにソーシャルビジネスを展開する企業でつくる証券市場の創設を提案。授賞式には、グラミン銀行から融資を受けて自立した農村の女性らも招かれた。

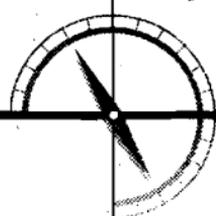


メダルと盾を手に写真撮影に応える  
ムハマド・ユヌス氏(AFP時事)

朝日新聞 2006年11月12日(4頁)

# 水/地平線

すいへいせん/ちへいせん



## 平和賞 社会起業家に光

今年のノーベル平和賞に選ばれたバングラデシュ出身の経済学者ムハマド・ユヌスさん(66)は、欧米で「ソーシャル・アントレプレナー(社会起業家)」の草分け的存在として知られている。政府や非営利団体が従来担いがちだった福祉や教育、環境といった公共性の高い問題に、収益事業として取り組み、解決していくと試みる人々だ。



ユヌスさんが創設した「グラミン(農村)銀行」の事業

稲田 信司

ロンドン

は型破りだった。貸出先は農村の貧しい人々だけ。それも家計を切り盛りする女性が大半だ。土地など担保は取らない。融資の焦げ付きを防ぐため、地域の住民に返済の連帯責任を負わせる。借り手だけでなく、地域全体の暮らしの底上げを目指す。

銀行は裕福な人に金を貸したがる、というのが常識だ。しかし、貧しい人々に金を貸すことが事業として立派に成り立つことを、ユヌスさんは身をもって示した。

「社会起業家とは、彼のよ

うに世の中の常識的発想をガラッと変えることができる人なのです」。社会起業家を集めた国際会議を取材した際、ユヌスさんと旧知の仲であるビル・ドレイトンさんがそう語っていた。ドレイトンさんは、世界各地で17000人を超える社会起業家を発掘し、有望な事業に資金を投じている「アショカ財団」(本部・米バージニア州)の代表だ。

社会起業家がつくる組織は、その公共性からしばしば非営利団体(NPO)に分類される。しかし、「非営利」

のレッテルを嫌う起業家は多い。「我々の仕事は慈善ではない」とドレイトンさん。むしろ、利益を追求する一般企業と競ってこそ、事業の効率性が高まり、質のいいサービス提供につながると考える。



「そのサービスは、国がやるより効率的で、質も高かった。先細る教育や福祉を支える力が社会起業家にあることを実感した」

バングラデシュのような途上国ばかりでなく、今や英国など高福祉社会がきしむ先進国でも、社会起業家への関心は急速に高まっている。貧困対策にあまり関心を示さなかった英最大野党保守党

ユヌスさんへの平和賞は、世界で活動する彼ら社会起業家への激励だったのではないかと思う。この活動形態は、日本でも公共サービスの担い手としてもっと検討されていいはずだ。

の国會議員シャレシユ・バラさんらは、夏休みを利用して、起業家の活動ぶりを視察した。学校教育から取り残された貧しい家庭の子どもたちを支援するロンドン南部の組織「キッズカンパニー」に1週間通ったのだった。